

「先生、昔の人は本当に頭がよかったんだね。」

ー 小子どもが歴史と出会う一つの方法ー

イ・ハナ(大邱・北大邱初等学校)

私たちはいついかなる瞬間でも、過去から遠ざかり、また出会います。時代も人も走る車窓の外の風景のように過ぎ去っていきますが、それは私たちがいる地点が常に過ぎ去る時間の重なりの上にあるからです。しかし、常に現在進行形の生活の中で過去を意識することは容易ではありません。しかも、幼い子どもたちにとって、日常の経験から離れた時空の座標を行き来することは、もしかしたら別の星を旅するようななじみのないものかもしれません。この時、少し立ち止まって、私たちの中に存在する時間の深さを感じ、数多くの人生を遊泳しながら、自分の世界を広げることができるよう手助けできるものこそ歴史の授業ではないかと考えます。歴史の授業は、まさに子どもが歴史と出会う方法となるのです。

ここで簡単に紹介する授業の物語は、2022年の小学校3年生の社会科の授業で子どもたちといっしょに学んだ私と子どもたちとの体験談です。2015 改訂教育課程<学習指導要領にあたる:訳者>にもとづき3年生2学期には、「時代ごとに異なる生活のようす」というテーマで、昔の人々の生活道具や住居形態を調べ、現在の生活のようすと比較し、その変化を探究する学習が行われます。ここで「昔の人々」の背景は先史時代から始まりますが、5年生2学期の歴史領域の学習が古朝鮮から始まるので、実際にはそれ以前の歴史を学ぶ重要な時期です。¹

授業を進めるにあたってはいろいろ悩みました。「遠い昔という時間的なギャップをこえた出会いをどのように進めるのか。自然から手に入れた石や木などを生活道具として使っていたという事実をどのようにわからせるのか」。それは、異なる時代の中で人間が生きてきたやり方であり、現在の私たちとは異なるくらし方を深く理解させるための悩みでした。どうすれば、彼らの生活を単純化せず、また単に発展的な観点から「不便だった」と評価することなく、遠い昔の人々とうまく出会うことができるのでしょうか。教師と子どもたちがいっしょに書き下ろしたこの物語を始めたいと思います。

出会いのための準備

ある日、学校の校庭から先端が尖っていてこぶしほどの大きさの石を一つ拾ってきて、黒板の前に何気なく置きました。ときにはなぜここに石があるのか不思議がる子どももいましたが、ほとんどの子はそのまま見過ごしているうちに一週間がたちました。そして、教科書の67ページを開いた日、絵を見ていた生徒が叫びました。²

「あの石と同じような形をしている!」

話の端緒が開かれました。子どもたちは石に興味を持ち始め、昔の人がこんな形の石で何をしていたのか、石のどの部分を手に持って使っていたのか、周りに尖った石がなかったらどうしたのか、石を使ったら手が痛くならなかったのかなど、たくさんの考えを出し合い、お互いに発言を聞き合いました。ついには、私たちが今使っている道具が昔はなかったこと



<絵1> 昔と今の生活のようす

¹ 2022年改訂教育課程では、小学校5～6年生群で先史時代を学習する（先史時代と古朝鮮の遺跡と遺物を活用して当時の人々の生活を考える）。

² <絵1> パク・ヨンジョ他『初等学校社会科3-2』天才社版教科書、2022、p. 67

に気づき、「じゃあ、そのころはどうやって生活していたんだろう」という疑問を投げかけてきました。教師が待っていた瞬間が来たのです。

とても遠い過去のことは現在の暮らしとは違うので、難しく抽象的です。自分とは全く関係がないように見えます。このようなテーマを導入し、有意義な学習の足掛かりを用意することは、教師の重要な役割であり課題です。会話という相互作用の場でいっしょに見つけた「問い」は強い探求の動機づけとなり、過去について想像することは、自分とは違う人の暮らしへの好奇心につながる可能性があります。その自然な土台を提供し情報を限定的に投入して、出会いのための準備をすることから授業を開始しました。

出会いの過程－教師の役割

私たちは、「昔の人はどのようにくらしていたのだろう」を中心テーマにして、彼らの暮らしについて研究することにしました。具体的な活動テーマは、それぞれの研究結果をもとに昔の人々の暮らしにかかわる物の模型を作って教室博物館に展示し、クラス全員で共有することでした。授業は以下のような流れで行われました。

授業の流れ	
質問づくり「昔の人はどのようにくらしていたの」	資料
①私の研究テーマと対象を決め関連する情報を集める	オンライン博物館、教科書など
↓	
②情報を選択、活用して模型を作る	自然のもの、粘土、生活材料など
↓	
③教室博物館に展示 研究の成果を共有する	研究報告書、展示物の名札
昔の人たちの暮らしのようすについての研究・展示の結論を共有する	

出会いの過程を手助けするための教師の最初の役割は、子どもが没頭できる雰囲気をつくりだし、有意義な学習を経験するために適切な活動テーマを示すことでした。そのために、「研究する」という状況を設定し、子どもたちに「研究者」という役割を与え、研究成果を「展示」という現実的な目標を設定しました。子どもたち、それも小学 3 年生の歴史研究とは、厳密に言えば穴だらけで既存の知識を再現するレベルと言えるかもしれませんが、子どもが真剣に受け止めた「研究者」という役割は、学習に対する主人公だという意識と責任感を持たせるものでした。一連の段階をへて自分なりに生み出した研究成果は、自らの思考と行為を経て構成され「意味が加わった成果」であり、単なる知識の羅列や再現とは異なります。特に、この授業の主眼は、いくつかの生活用具の種類や住居形態の名称を知ることよりも、過去の生活のようすをより深く理解することにあつたので、研究や展示は考えや悩みを刺激するテーマになることを期待しました。

さて、いよいよ子どもたちが本格的に動き出す番です。「昔の人たちの暮らしのようす」という大枠の中から、子ども一人ひとりが自分の研究テーマと対象を決めるためには、多様で豊かな探求がなされなければなりません。一人ひとりの探求に先立って、私たちが関心を集中している歴史の時代背景を知るため

に、旧石器時代と新石器時代の流れを扱った 6 分ほどの短い映像³をいっしょに視聴しました。「昔の人たち」や「時間がたった後」などの説明は簡単で直感的ですが、時間認識を曖昧にします。子どものレベルでは、具体的な時間表現や時代区分は難しかったのですが、私たちが扱おうとしている時間帯はずっと昔の人間生活の初期に相当し、私たちは非常に長い時間の間に起こったさまざまなできごとの一部に注目するという感覚を持たなければ歴史的理解はできません。⁴ アニメーションで展開される映像を見て、その遠くて長い時間についての感覚を共有し、映像の中で特に印象的だった部分や興味のある部分について話し合いました。このことは、自然に子ども個々の研究テーマや研究対象につながることもありました。教育課程では、旧石器時代と新石器時代はもちろん、先史時代も区別せず、打製石器のような具体的な用語も使っていませんが、子どもがそのような内容に疑問をいだいたり興味を持ったり、それについて発言したときは、簡単な説明を付け加えながら、歴史用語を自然に使えるようにしました。



＜絵 2＞ 釜山博物館－オンラインでたのしむ博物館の「東萊館 先史室 VR」の場面

その後、一人ひとりの探索にはオンライン博物館のサイト⁵を活用しました。博物館を訪問して遺物の姿を実際に見ることができればもっとよかったのですが、オンライン博物館を通じて先史時代のさまざまな遺物を十分に観察することができました。

上の＜絵 2＞は、授業で活用した釜山博物館のオンライン博物館資料です。子どもたちは個人のタブレット PC でオンライン博物館を自由に回りながら遺物を見て、特に興味があるものやもっと調べたいことを考えました。博物館の先史時代の展示室に足を踏み入れてもずらり並んだ石や土器の前を通り過ぎることが多かった教師である私とは違って、子どもたちはとても興味深く積極的に探究活動に参加しました。

³ YouTube チャンネル「ロビンの歴史記録」『旧石器と新石器時代をまとめると 韓国史 1 部』
(<https://www.youtube.com/watch?v=B8YcpbYo7Hc>)

⁴ 本授業では試せなかったが、簡単な年表などの視覚資料を通して今よりどれだけ遠い過去なのか、どれだけ長い時間なのか、パノラマを描く手助けもできる。

⁵ 「釜山博物館－オンラインでたのしむ博物館「東萊館 先史室 VR」
(<https://embed.360vrmuseum.com/showcase/W7A453enU7X>)

それぞれが十分に探究した後⁶、テーマとして大きく衣・食・住の3領域に分け、そのうちの1つを選択しその領域で自分が研究する対象、つまり生活道具か住居形態に決めました。模型を作るためには、対象についての説明だけでなく、さまざまな視覚資料も必要でしたが、オンライン博物館や社会科教科書で得られない情報は、インターネットの百科事典を活用して検索するようにしました。ただし、インターネットで情報を探すことにまだ慣れていない子どもたちのために、教師がいっしょに資料を読み、詳しく説明を加えながら、適切な出処の情報を慎重に選択し、その内容を理解できるように支援することが非常に重要でした。

探求の時間を十分に取ったことで、子どもごとに関心を引かれたポイントが生まれ、知りたいという気持ちがわいてきました。この時、子どもが必要とする資源、つまり情報や資料を継続的に提供し、その資源を適切に扱えるように助力することが教師の担うもう一つの重要な役割でした。これには、子どもが考えたことを実際に具現できる方法をいっしょに考えたり、時には他の友だちと協働したりできるようにチームを組むことも含まれます。いろいろな子どものアイデアやチャレンジ精神は、しばしば教師の予測や準備から外れることもありますが、その考えを真摯に検討し、「考えについて考える」機会を作ることで、学習を支援することもできます。一例ですが、石器に興味を持ったある子どもが自分で石を割って打製石器を作ろうという研究計画を発表したとき、私は内心とても面白いと感じながらも安全上の理由からあきらめさせたことがあります。私たちが石を割ったり削ったりするのは難しいですが、代わりに当時の人々が石器を製作した方法に関する資料をいっしょに探すことにし、先ほどの釜山博物館・オンライン博物館が提供している「石器製作方法」の映像を見ながら「石を割る」ということについて考えてみました。このように歴史との出会いの過程はダイナミックに進み、子どもたちは自分で調べた内容を整理しながら資料を収集し、準備した資料と自分が考えた製作方法について教師とそのつど話し合いながら、自分の研究を積み重ねていきました。



＜絵3＞ 釜山博物館－オンラインでたのしみ博物館提供の「石器製作の方法」映像

観察と探求－子どもたちの研究と展示

模型づくりの活動は、美術と合科で行いました。昔の人たちのように自然から得た自然のものを利用してみることにしましたが、形を表現するために一部は土の代わりに粘土や身近な材料も活用しました。休み時間には運動場のまわりを歩き回って石や木を拾ってきて、授業の時間には写真や絵を熱心に見ながら小さな手で模型を作りました。形と構造を再現するために苦労しながら試し、当時の人々も同様に経験

⁶ 子どもたちが必要だと感じた探索の時間が異なっていたので、いっせいに活動をやめることはせず、研究対象を決めた子どもから次の活動を進めた。

したであろう試行錯誤をくり返しながら、自分なりの作品を一つ一つ完成させていきました。櫛形文様土器に模様を一つ描くことも慎重に行いながらです。



<絵 4> 子どもたちが作成した生活用具の模型（左から、握斧・櫛形文土器・紡錘車）

模型を製作するのはそう簡単ではありませんでした。子どもたちは、写真に写っている実際の遺物の形を細かく観察し、自分が作っている模型の形とを比較する作業をくり返しました。また、調査した内容を反映させるための写真が見つからなかったものは想像して作ることもありました。<絵 5>の櫛目文土器を研究した子どもは、2時間近くかけて粘土で土器を作りました。形を作るのが難しいと何度もやり直しましたが、それでも「底が尖っていて直立させることができないのだから、砂に埋めて使うか台座を使ったのだろう」という調査内容を考えながら、土器の台座まで完成させました。

<絵 5>

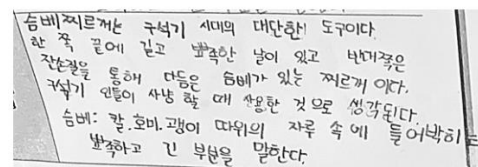


子どもの作品（上）

記録した内容（下）

下の<絵 6>の尖頭器を研究していた子どもは、先の尖った石と長い木を持ってきて、中子がないので石と木をつなぐことができないと言いました。資料を読みながら中子が何であるかを理解するようになったのです。私たちは参考写真をさらに探し、その子はその後、紐を持ってきて石と木を結んできました。そして、紐はあまりにも「今のもの」なので、粘土を塗って土の色を出す必要があると言いながら、自分の作業を続けていました。

<絵 6>



子どもの作品（左）、記録した内容（右）

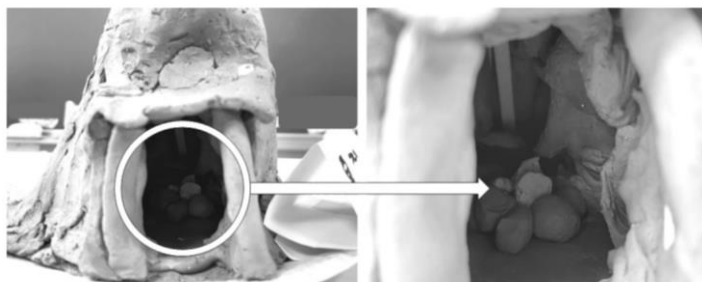
竪穴住居を研究すると言った子どもも何人かいましたが、これはとても難しかったです。草や小枝をかぶせて屋根をふこうとしましたがうまくいかず、それに先生は柱まで立てごらんと言うけどできないという声

があちこちで相次ぎました。あきらめるわけにはいけないので、竪穴住居を研究している数人の子どもを集めてチームを作りました。子どもたちは頭を突き合わせて方法を考え、木製の箸を利用して柱を立て、扱いにくい草に代わって粘土で壁と屋根を表現しました。竪穴住居の中にいろりまで作ってありました。

<絵 7> 協力し合って竪穴住居を作るようす



<絵 8> 子どもたちが作った竪穴住居内部の柱といろり



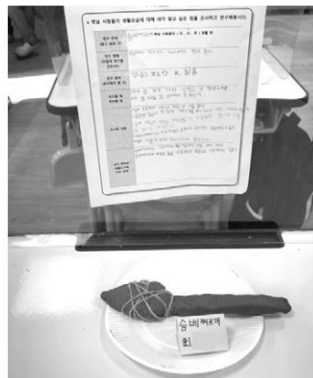
作った模型は自分の机に展示しました。気をつけながら皿に載せ、来場者の視線を考慮して自分が見せたい部分が特によく見えるように向きを調整しました。展示物と研究者の名前を書いた名札を作って立て、研究過程で作成した報告書・展示説明書も完成し、みんな教室の後ろに掲示しました。

本授業では、ギャラリーウォーク方式でお互いの研究成果を共有しましたが、グループを分けてガイドと観客を交互に役割分担するようにもできます。役割分担をする場合は、自分の学習成果について口頭で説明することでより深く理解できるとともに、仲間といっしょに問いかけたり答えたりすることができるという長所があります。

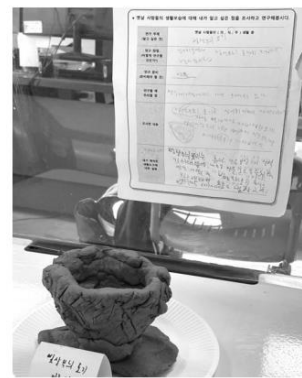
<絵 9> (上) 教室博物館展示の場面 (下) 子どもが作った説明書の内容



「洞窟では寒さと暑さを避けることができました。また、眠ることもでき、移動生活をしました。例えば、まわりの木の実を取ったり動物を狩ったりして食べ物を手に入れることができますからです。」



「尖頭石器に尖った石を利用して、動物を狩ったりしました。」



「橢形文土器は粘土で作ったものだが、新石器時代ごろに現れたと推測されている。昔の人たちは橢形文土器に食べ物を保管したが、今は冷蔵庫に保管する。(時代差)」

* 子どもが書いた内容は、文章に誤りがあっても直さずそのままにしてある。

このように、子どもが昔の人々の生活と出会う過程では、目に見えるものへの観察と目に見えないものへの探求がくり返しともない、さまざまな情報を活用して創造的・創意的な何かを行う中でなされた真摯な参加と深い思考は、過去と歴史に対する子ども自身の意味を構成する経験を可能にしました。展示説明書に「橢形文土器は旧石器時代のすごい道具だ」と書いた子どもには、石を使った道具とそれを作った昔の人々に対する自分の内なる反応が生まれ出たのです。「橢形文土器は(中の)空間が広いので、今の器より簡単にたくさん入れることができた」と書いた子どもは、授業で観察した昔の土器と現在自分が使っている器を自然に比較することになったのです。「昔の人は橢形文土器に食べ物を保管していたが、今は冷蔵庫で保管する」という、他の子どもの説明は、発達の視点からではなく、過去と現在をいっしょに見る視点から「変化」を感じるようになったことを示しています。歴史を学び始めたばかりの子どもたちの研究や洞察と解釈は、当然ながらまだ非常に初歩的なものですが、今後学習を積み重ねていく中でより明確かつ詳細に歴史を理解し、より複雑な歴史問題を解決し、歴史について有意義な思考と行動を展開していくことができるようになることでしょう。

出会いのまとめー「先生、昔の人は本当に頭がよかったんだね。」

授業は、これまで進めてきた昔の人々のくらしのようすを研究、展示したことを通して得た結論を発表することでしめくくりました。子どもたちが何を感じ、どう考えるようになったのか、とても気になっていました。

はたして、当初の意図していたように、はるか昔という時間の隔たりを越えて、当時の人々の生活とうまく出会えたのでしょうか。授業に参加した全員が発言する中、多くの子どもが、自然から手に入れた材料を使って生活に必要なものを作っていた昔の人々のくらしのようすを説明しました。単純で簡単そうに見えた道具の形を実際に作ろうとすると、難しくて大変だったという反応もかなりありました。私たちは、粘土や木の箸、プラスチックパイプで作ったのですが、昔の人は機械もなく「本物（自然）」で作ったと大きな声で話した子どももいました。最初の時間に石器遺物を見て笑っていたある子どもは、その言葉を聞いて「今思えばすごいね」と短い感想を述べ、尖頭器を作った別の子どもはすごい発見をしたかのようにこう叫びました。

「先生、昔の人は本当に頭がよかったんだね。」

子どもたちは、昔の人々の生活のようすを探求し、再現するために真剣に悩み、熱心に取り組みました。適切な材料を手に入れるために石や木のような自然の形態に注意を払い、櫛形文土器の形を作ることの難しさを感じながら、先史時代の人々が生活道具を作った時を想像してみました。石器をより効果的に使用する方法や、竪穴住居を崩れないように建てる方法についてひそひそと話し合ったりもしていました。子どもたちの学びは、出会いの結果として得た知識だけでなく、出会いの過程で経験したあらゆる瞬間にありました。

教科書の数行の文をしっかりと深く理解するために、私たちは何時間もの時間を経てきましたが、その時間を通して過去の生活を固有の生き方の方式としてとらえ、さらに与えられた環境や条件のもとで発揮された当時の人々の知恵を見つけることができました。過去に対する「表面的な理解」を超えて「共感的な理解」を追求する出会いは、過去にも私たちと同じような人々が生きていたという考え、彼らが生きた背景は自分と違うという理解、優劣の判断ではなく固有の生き方の尊重につながるすることができます。そして、それは現在でも存在するさまざまなくらしに接する方法に転移することと思います。

子どもが歴史と出会う方法は限りなくたくさんあります。歴史との出会いをなじみのないものではなく自分の人生の視野と世界観を広げる媒介となるように、これからも子どもといっしょにさまざまな物語を書いていきたいと思います。

<訳 平野昇>